本編⑭「第一大『犍度』」その３「初転法輪」2020.9.19

釈尊が使う一人称、四つくらいある

①如来 tathāgata：ブッダだけの異名。仏の九号にも入らない。あだ名とかタイトルとは別の何か。「如来は…」主に教義を説く。

（②諸仏 buddhā：［第三者の語りの中かも。］ブッダに二義あり。１・その世界で最初に悟りを開いたブッダ（覚者）、過去七仏。２・悟りを開いた覚者（ブッダ）＝阿羅漢たち。「諸仏（過去仏を含め仏たる者）は」…主に比丘としての生活様式を語る。）

③私 aham：世俗の法則・ルールで仮に自称するとき。二人称、三人称もみんな仮の名前。

④他動詞と共に「私が言う」[aham] vadāmi「私が教える」aham anusāsāmi など：ブッダである釈尊特有の出来事について「私が内容に責任持ちます」。

〇五群比丘と再会

次第に遊行してバーラーナシーの仙人住処・鹿野苑に至り、五群比丘のいる処に近づいた。

五比丘は遠方より世尊が来られるのを見て、お互いに決めた：「あそこに来るのは沙門ゴータマである。彼は贅沢になり精勤が乱れた padhāna-vibbhanta。彼に礼をしてはいけません。立って迎えてはいけません。彼の衣鉢を受け取ってはいけません。**目上としては扱わないの意。**ただし、座は設けましょう。彼が欲するなら座るでしょう」**失望して腹を立てた（日本人の感情的解釈）のではない。**

→対等な修行仲間として扱う。未だ悟らぬ、悟りを目指す修行者として、みな平等。

→五群比丘は釈尊を悟っていないと思っていたことが読み取れる。

釈尊が近づいてくると、自分たちの取り決めを守らず立って迎え、衣鉢を受け取り、座を設け、足を洗う水、足台、足を拭く布を持ってきた（比丘戒の前から上流階級の作法だった）。ただし、世尊を名前（ゴータマ）や「友よ āvuso」という言い方で呼んだ。**→対等か目下に対する呼び方。**

「比丘たちよ、**如来を**名前や『友よ』で呼んではいけません。比丘たちよ、**如来は**阿羅漢（応供）正等覚者です。比丘たちよ、耳を傾けなさい。不死が証得され［たので］**私が教えます**。**私が法を説きます**。教えに従って修行すれば、じきに現世で自らありありと修行の終了に至ります。

mā bhikkhave **tathāgataṃ** nāmena ca āvusovādena ca samudācaratha. Arahaṃ bhikkhave **tathāgato** sammāsambuddho. Odahatha bhikkhave sotaṃ, amataṃ adhigataṃ, **ahaṃ anusāsāmi**, **ahaṃ dhammaṃ desemi.**」

「ゴータマよ、あなたは苦行していた間、悟りを開けませんでした。どうして贅沢になってから悟れましょうか？」、

「比丘たちよ、**如来は**贅沢しません。**如来は**阿羅漢……」三回繰り返す。
「比丘たちよ、私が今までこのように(悟ったと)言ったことがありましたか？」
「いいえ。」(つまり、このたび初めて「悟った」と言ったのは本当のことではないか？)」
→やっと話を聞く気になった。

〇初転法輪は理詰めの説法
・中道←苦行を捨てたことへの五群比丘のこだわりを説く意味も？
「出家者が近づくべからざる二辺がある。
①欲の楽に沿う卑しい凡夫の所行。②自分を痛める苦に沿う無利益な所行。
如来はこの二辺を乗り越え（近づかず）an-upa-gamma 中道をありありと悟った。それは目を開くもの、智慧を開くもの、寂静・現等覚・涅槃に至るもの。
Ete kho bhikkhave ubho ante anupagamma majjhimā paṭipadā tathāgatena abhisambuddhā cakkhukaraṇī ñāṇakaraṇī upasamāya abhiññāya sambodhāya nibbānāya saṃvattati.」→「真ん中の道を<u>歩む</u>」のではなく中道という涅槃に関わる何かに<u>達した</u>。
・中道は「悟りに至る道」の意味。「中道とは超越道」スマナサーラ先生。

・「比丘たちよ、**何が……中道か？　八聖道なり。**
（すぐに続けて四聖諦［その最後は八聖道］）
・比丘たちよ、苦聖諦とは、生 jāti・老 jarā・病 vyādhi・死 maraṇa（四苦）。
・一生涯だけでなく一刹那も生・住（≒老＆病）・滅。生滅の連続＝生存が苦。
・「非生存」も苦というかムリ。非生存＝死の直後にまた生まれる。
（八苦→苦 dukkha とは生命の苦しみだけでなく「好ましくない du こと kha」）
怨憎会苦 appiyehi sampayogo dukkho、
・嫌な生命や状況に遭うだけでなく、瞬間ごとの触→受も
六根（眼耳鼻舌身意）と六境（色声香味触法）のぶつかり合い＝苦。
愛別離苦 piyehi vippayogo dukkho、
・愛着ある生命や状況と離れるだけでなく、瞬間ごとの変易・消滅も苦。
求不得苦 yam p' icchaṃ na labhati tam pi dukkhaṃ、要するに saṃkhittena
・瞬時に変易・消滅するので、何を求めても得られることはない。
五取蘊苦 pañc' upādānakkhandhāpi dukkhā です。
・要するに、「色受想行識の五蘊に執着すること＝五**取**蘊」が苦。
→漢訳？の「五蘊盛苦」では不正確。　　参考：誓教寺施本『死ぬ覚悟できてますか？』

苦集聖諦は……
苦滅聖諦は……
苦滅道聖諦は八聖道……